

論 文

寺内文庫収蔵「広開土王碑」拓本の研究

—【C1—2型】類型・甲乙二拓本の場合—

武 田 幸 男

第一章「寺内文庫甲本」「寺内文庫乙本」の収蔵・弁別問題

一、寺内文庫収蔵の甲乙二拓本

山口県立大学の「桜圃寺内文庫」は、高句麗・広開土王碑の二拓本を収蔵する。本稿では、それらの二拓本を各々「寺内文庫甲本」（または「甲本」）、「寺内文庫乙本」（または「乙本」）と略称し、これらの二拓本を合わせて「甲乙二拓本」と表記する。

寺内文庫は元帥陸軍大将・寺内正毅氏（一八五二～一九一九年）が企画し、元帥陸軍大将・寿一氏（一八七九～一九四六年）が父の遺志を受け継いで、一九二二年に寺内氏の故郷、山口県吉敷郡宮野村桜島（いま山口県山口市桜島）に創立された寺内家の私設図書館である。

寺内正毅氏は明治・大正の著名な軍人政治家であり、桜圃と号す。宇多田正輔氏の三男として誕生し、母方の寺内家を継いで、陸軍・外務・大蔵の各大臣を経、第三代韓国総監（一九一〇年）、初代朝鮮総督（一九一〇～一六年）、第一八代総理大臣（一九一六～一八年）の重職を歴任した。寺内氏は郷党子弟に東洋古来の士風を喚起し、史書研鑽に供するために、かねてより寺内文庫の創設を構想していたが、その構想はかれの没後に実現された。

寺内文庫は戦後、一九四六年に山口県に貸し出され、山口県立女子専門学校（の付属図書館として利用され、五七年にその蔵書は山口県に寄贈された。その間、五〇年に県立女子専門学校は山口女子短期大学に、七五年に山口女子大学に、九六年に山口県立大学に順次改編されたが、寺内文庫は一貫して上記の各大学付属図書館として利用された<sup>①</sup>）。

二、甲乙二拓本の収蔵問題

寺内文庫は多数の拓本を収蔵しているが、そのうち「最も注目されるのが「高句麗広開土王陵碑」<sup>②</sup>と評価されている。そこで、以下、各種の関連資料を一覧し、甲乙二拓本が寺内文庫に収蔵された事情を追跡してみよう。

はじめに、開庫当時に印行された『桜圃寺内文庫図書目録』（一九二二年）<sup>③</sup>は蔵書七五〇冊余を著録しているが、それは一般閲覧者向けの通俗書を「引抜き採録」したものであって、件の甲乙二拓本は見当たらない。

つぎに、国内所在の朝鮮本調査の一環として作成した田川孝三著『桜圃寺内文庫朝鮮本調査報告』（一九六五年）<sup>④</sup>によれば、当時の山口女子短期大学付属図書館の寺内文庫本、尺牘類条に「高句麗広開土王好太王碑 四幅」とあり、ここにおいて、初めて寺内文庫収蔵の広開土王碑拓本、少なくとも全四面・四枚（四幅）即ち拓本一本分が確認される。ただし、拓本の部数は明記されず、甲乙二拓本が揃っていたかどうかは不明である。

つぎに、初めて本格的な寺内文庫研究に取り組んだ国守進編『桜圃寺内文庫の研究』（一九七六年）は、注目すべき論文二編を収録する。その一つは国守進「寺内文庫朝鮮本・李朝文書について」であって、そのなかで李進熙氏の研究<sup>⑤</sup>によりながら、件の拓本の類型は「内藤拓本（総督府拓本グループが最も近い）」とし、またその制作時期について「明治末～大正期の拓本である」と指摘した<sup>⑥</sup>。この見解は大いに参考になるが、国守氏が諸拓本を比較したさいに、甲乙二拓本のうちの拓本を、どのように考察したのかは明らかでない。

もう一つは原川一郎・池田啓子「桜圃寺内文庫和漢書目録」であって、その別集、拓本類、中国・朝鮮条に「広開土王陵碑 4枚（2部）」と明記された<sup>⑦</sup>。即ち、ここに至って、初めて甲乙二拓本が確認される。

つぎに、拙著『広開土王碑墨本の研究』（二〇〇九年）は、「寺内正毅甲本」

と「寺内正毅乙本」とが共に石灰拓本の【C1—2型】類型に属する整拓本であり、寺内氏が一九一〇～一六年に入手したと推定した<sup>80</sup>。その類型は筆者独自の基準により、甲乙二拓本のスナップ写真で判定したが、拓本の収蔵時期は推測の域にとどまるものである。

つぎに、本格的な寺内文庫研究を一段と発展させた伊藤幸司編『桜圃寺内文庫の研究』（二〇一三年）は、注目すべき永島広紀「寺内正毅と朝鮮総督府の古蹟・資料調査——「桜圃寺内文庫」の成立前提史——」を収録する。この論文は「一九一三年から一九一六年にかけて実施された朝鮮総督府官房「参事官室」および中枢院調査課による朝鮮金石文の調査・収集にまつわる報告書とその補助資料（中略）を元に編集されたのが『朝鮮金石總覧』（上・下・一九一九年三月／補遺・一九二三年三月）である」と指摘し、「この間の経緯について『朝鮮旧慣制度調査事業概要』は「大正三年七月、著名なる拓本五十五種を本府會議室に陳列し、寺内総督初め本府職員其の他有志の観覧に供したり」と記している」と紹介したうえで、「現在、寺内文庫に蔵される「高句麗広開土王陵碑」拓本は、或いはこのときに（中略）参事官室から寺内総督に献呈されたものかと推定される」と指摘した<sup>81</sup>。ただし、永島論文は甲乙二拓本の区別についてとくに言及しなかったようである。

以上の関連資料によれば、少なくとも甲乙二拓本の中の一本が確認されるのは一九六五年を下限とする。また、甲乙二拓本が揃って確認されるのは一九七五年を下限としていて、寺内文庫の創設後すでに半世紀を経過したところになる。

しかし、収蔵時期の上限がいつまで遡るのか、それについては予断を許さない。あえていえば、寺内文庫創設の一九二二年まで遡ることすら否定できないと思われる。また、甲乙二拓本が同時に収蔵されたのか、それとも別々かと問われれば、いまのところ皆目不明というほかない。甲乙二拓本の収蔵時期の問題はいまなお不明であり、今後の課題として残される。

### 三、甲乙二拓本の弁別問題

甲乙二拓本の収蔵問題に加えて、新たに二拓本の弁別問題が提起された。即ち、二〇一七年一〇月に、山口県立大学准教授・渡辺滋氏から、甲乙二拓本の八面・八枚が混在している現状と、混在した八面・八枚を拓本来の二拓本に

弁別すべき問題について連絡をいただいた。この弁別問題の解決は甲乙二拓本の本格的な研究にとって不可欠の、はなはだ重要な課題に他ならない。

甲乙二拓本の性格は互いによく似ていて、その実状は拓本の現状、類型、着墨状況や用紙法に即して、以下順次考察するであろう。おもうに、これまで二拓本を明確に区別し難かったり、二拓本が混在してしまうような状況は、両拓本の性質が酷似することに起因したのかも知れない。

さて、筆者が寺内文庫の広開土王碑拓本を知ったのは、九州大学文学部助教（当時）・濱田耕策氏より一九九〇年三月九日撮影の写真二〇枚を受贈したときである。拝観すると、それは拓本を多様な角度から撮影したスナップ写真であり、しかもよく観察すると、一拓本分に止まらないように思われた。

その後、筆者の照会に応じて、二〇〇三年七月に濱田氏からスナップ写真一枚ごとに撮影順序をメモし、二拓本に仕分けた丁寧な返書をいただいた。甲乙二拓本は一九九〇年までに、やはり寺内文庫に収蔵されていたことが分かる。拙著『広開土王碑墨本の研究』はこれを「甲本」「乙本」と命名し、共に【C1—2型】類型に属する拓本と判定したのであるが、それは濱田氏から贈られたスナップ写真と丁寧な教示に基づくものである。

しかし、二拓本の弁別問題は、二〇一七年に渡辺滋氏から連絡を受けるまで、そのまま放置された。同年一月、渡辺氏の好意により二拓本の拓影写真を恵贈されたので、この拓影写真と濱田氏撮影のスナップ写真とを熟覧し、慎重に比較検討した結果、一九九〇年当時の「甲本」と「乙本」とに各々弁別することができた。

二〇一八年三月一三～一四日、筆者と共同研究者・赤羽目匡由氏、橋本繁氏は山口県立大学を訪問し、渡辺氏の厚意と協力をえて、寺内文庫収蔵の甲乙二拓本を調査して、予想に違わぬ成果があげられた。

## 第二章「寺内文庫甲本」「寺内文庫乙本」の現状

### 一、甲乙二拓本の現状(一)——紙墨と面番号——

寺内文庫収蔵の甲乙二拓本の弁別結果に従って、その拓影をそれぞれ「写真1」「写真2」に示す。

写真1「寺内文庫甲本」拓影

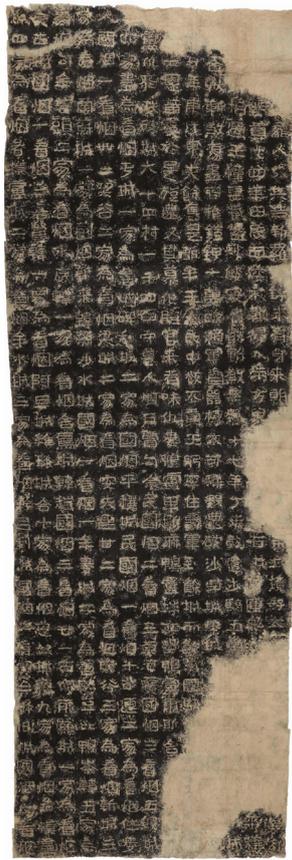
第一面



第二面



第三面



第四面



写真2「寺内文庫乙本」拓影

第一面



第二面



第三面



第四面



甲乙二拓本はそれぞれ折り畳み、紙箱(およそ縦五一×横三八×高さ二三センチ)に収納して保管する。保管状況は概ね良好である。ただし、現在の拓本の折り方は、その折り目と面番号とが重複する事例が認められるので、拓出直後と異なる折り方である。

二拓本の紙墨は共に通常一般の石灰拓本と同様に、用紙は薄くてやや雑であり、その一部は小さな穴状を呈する部分も見うけられる。墨は触れるとすぐ汚れるような通常の煤墨を用い、直径一〇センチ程度のタンポを使い、濃墨をもって拓出する。

また、通常一般の石灰拓本と同様に、面番号が拓本の裏面に貼付された。即ち、拓出直後に折り畳んで表出した裏面の中ほどに、拓紙と同質の縦横三〜五センチ程度の小紙に各々「一」「二」「三」「四」と墨書して貼付した。調べてみると、「甲本」裏面に面番号を貼付した位置は、第I面では拓字(左文)の「浮」(I 03—03)、第II面の「其」(II 05—05)、第III面の「戦」(III 05—04)、第IV面の「萬」(IV 06—03)や、その近くに確かめられる。

また、「乙本」裏面の面番号は、第I面では拓字(左文)の「然」(I 03—05)、第II面の「城」(II 03—04)、第III面の「合」(III 05—03)、第IV面の「國」(IV 05—05)と、その辺りに認められる。

即ち、甲乙二拓本の面番号は、みな拓本裏面の特定の位置、つまり各面裏面の第一段<sup>10)</sup>第三〜六行の位置に集中する(およそ縦四〇×横三〇センチの範囲)。それは拓工が拓出直後に折り畳んで表出した拓本裏面の範囲に相当し、二拓本の各面を通じて常に一定していて、貼付した面番号が最も確認しやすい位置である。

このように見てくると、二拓本の紙墨の質、各面の折り畳み方や、小紙に墨書した面番号、その貼付位置等は互によく似ていることが判明する。

## 二、甲乙二拓本の現状(二)——石灰と泥土——

石灰拓本の基本的な特徴は、碑面に石灰を塗布して制作したことである。そこで注目したいのは、石灰を塗布した痕跡である。「甲本」を熟覧すると、まず、拓本各面の文字間と行間に濃墨の着墨部分が認められるが、それらは碑面に石灰を塗布した部分に対応する。

また、よく見ると、拓本を採るたびに石灰が剥落した部分を、新たに石灰を

塗布して修復した痕跡が認められる。さらに、石灰を塗布して作った石灰文字も多数摘出される。その代表的な事例は後に詳しく考察するであろう(本稿第四章二、「図表I」)。

ここで重要なのは、以上に指摘した「甲本」の石灰の塗布状況が、「乙本」でも同じように確認されることである。それと関連して強調したいのは、「甲本」に付着する石灰粒が検出されたことである。最長径一・三センチ程度の石灰一粒にすぎないが、それはこの拓本の第III面の拓字「千」(III 08—13)の裏面に付着する<sup>11)</sup>。

ところで、もう一つ注目したいのは、拓本裏面に付着した茶色の泥土(黄泥)である。しかも、それは甲乙二拓本にかなり広く分布する。その調査結果は下記のとおりである。「甲本」に付着した泥土の位置は、(1)第I面第三段(不着墨部分の貼り目、ポイント①<sup>12)</sup>を含む)、(2)第II面第二段(着墨部分の貼り目)、(3)同面第三〜五段(着墨部分と不着墨部分との貼り目)、(4)同面第九段(不着墨部分の貼り目以外)、(5)第III面第九段(不着墨部分の貼り目以外、ポイント②)の五か処である。

「乙本」に付着した泥土の位置は、(1)第I面第四〜九段(着墨部分と不着墨部分との貼り目、ポイント①を含む)、(2)第II面第四段(不着墨部分の貼り目以外、ポイント②を含む)、(3)第III面第八〜九段(不着墨部分の貼り目以外、ポイント⑥を含む)、(4)第IV面第九段(着墨部分の貼り目)の四か処である。

ここで想起されるのは、今西龍氏が一九一三年に現地輯安での体験談、即ち「碑面の深く脱落せる第一面の一部の如きは泥土を以て之を填充し、尚ほ四面ともに全面に石灰を塗り字形のみを現はし、字外の面の小凹凸を填めて之を平にし、唯拓本を鮮明にすることのみ務めたり」という記事<sup>13)</sup>である。

「第二面の一部」とは、碑石の四面のうちで最も深い亀裂が入った第I面の不着墨部分、つまりポイント①に相当し、そこに大量の泥土を塗り込んだというのである。ところが、甲乙二拓本の場合には、泥土は「第一面の一部」だけでなく、もっと広い範囲に及ぶ。

甲乙二拓本の泥土の付着状況を摘出してみると、第一に、付着した泥土はポイント①②⑥を含む拓本の裏面の「不着墨部分」に六例、「着墨部分」に五例が認められる。着墨と不着墨とにかかわらず、泥土を広い範囲にわたって付着したことが分かる。

第二に、付着した泥土は、継ぎ貼り用紙<sup>14)</sup>の「貼り目」部分に七例、「貼り目以外」の部分に四例認められた。やや貼り目部分に多いのは、タンポで叩いた圧力が二層の糊代部分に加重されたからだと思われる。

第三に、とくに強調したいのは、甲乙二拓本に付着した泥土が拓本ごとに四、五か処にのぼり、合わせて一一例に達することである。これまでの調査では、拓本裏面に付着した泥土が抽出された石灰拓本は二例だけであり、しかも一拓本につき一か処・一例に限られる<sup>15)</sup>。甲乙二拓本の特徴は、付着した泥土の多さとその広さに認められる。

以上において、甲乙二拓本の紙墨と面番号、および塗布した石灰や付着した泥土に関して考察した。その結果、それらはみな二拓本に共通して認められるのであって、両者の性格は互いに酷似すると考えられる。

### 第三章「寺内文庫甲本」「寺内文庫乙本」の類型判定

#### 一、「甲本」の類型判定

寺内文庫の甲乙二拓本の性格は、筆者提唱の「着墨パターン法」で判定した拓本類型に端的に示される。着墨パターン法は拓本の(一)不着墨パターンを基本的な基準とし、(二)着墨状況と(三)用紙法とを副次的な基準として判定する。「石灰拓本」類型・編年論<sup>16)</sup>である。この章では、基本的な基準の(一)不着墨パターンに従って、甲乙二拓本の類型を判定する。

甲乙二拓本の類型は、まず、不着墨部分の六ポイント①～⑥を特定する。つぎに、「写真1」「写真2」によって各ポイントの不着墨部分のパターン(形状とその大きさ)を確認する。さらに、そのパターンに適合一致する類型をそれぞれ抽出し、判定するのである。

まず、「甲本」から始めよう。そのポイント①は、拓本第I面の左端・中央から右側上方に向かって連続する白抜き不着墨部分である。「写真1」によると、「甲本」のポイント①の不着墨パターンは左右連続して五行に及ぶ。連続五行のパターンは【C1-2型】類型のみに一致する。これで、早々と、「甲本」は【C1-2型】類型と判定された。しかし、ここでは、念を入れて、以下の五ポイントについても比較対照してみよう。

ポイント②は、第II面の右端・中央から左側上方に連続する不着墨部分であ

る。その不着墨パターンは連続三行×上下一一字格である。このパターンは【C1型】類型、そのなかでも【C1-2型】【C1-3型】の二類型に最も適合する。ポイント③は、第II面の上端・中央から下方に連続する不着墨部分である。その不着墨パターンは連続二行×六字格に及ぶ。このパターンは【C1型】類型、即ち【C1-1型】【C1-2型】【C1-3型】の三類型に該当する。

ポイント④は、第III面上端・右側隅の直角三角形様の不着墨部分である。この不着墨パターンは、「写真1」によれば連続八行のように思われる。しかし、同面第一行は拓工が碑面に用紙を充てず(用紙不充)、着墨しなかった(不着墨<sup>17)</sup>)のであって、必ずこの一行を補って数えるべきである。従って、ポイント④の行数は、連続九行と数えられる。ポイント④のパターンは【C1型】類型に該当する。

ポイント⑤⑥も、ポイント④の場合と同様に、拓工が着墨しなかった第III面第一行を含む位置である。まず、ポイント⑤は同面右端・中央の台形様の不着墨部分である。その不着墨パターンは、第一行を補って連続三行と数えられる。このパターンはやはり【C1型】類型に該当する。

つぎに、ポイント⑥は、第III面下端・右側隅の大きな不定形の不着墨部分である。この事例では、第一行にポイント⑥固有の字格を特定することができず、そのため第一行の字格は数えない(第二行以下の字格を数える)ことに留意する。とすると、ポイント⑥の不着墨パターンの行数は、第一行を補って七行連続する。また、その字格数は最上の第二行第三二字格から、最下の第五七行第四一字格まで、通計して一一字格が連続する。この連続七行×一一字格のパターンもまた、【C1型】類型に該当する。

以上において検討した結果、「甲本」の六ポイントの全てに該当するのは【C1-2型】類型だけである。即ち、「甲本」は【C1-2型】類型に属すると判定される。

#### 二、「乙本」の類型判定

つぎに、「乙本」の類型を判定してみよう。その第I面のポイント①の不着墨パターンは、「写真2」によると連続五行である。そのパターンは【C1-2型】類型に一致する。

第II面のポイント②の不着墨パターンは、連続三行×一一字格である。その

パターンは【C1型】類型、そのなかの【C1—2型】【C1—3型】の二類型に最も適合する。

同面のポイント③の不着墨パターンは、連続二行×六字格であり、そのパターンは【C1型】類型、即ち【C1—1型】【C1—2型】【C1—3型】の三類型に該当する。

つぎは、第三面の第一行を含むポイント④⑤⑥であるが、さきに記したように、拓工が無視し、用紙を充てなかつた第一行は必ず数えるべきである。まず、ポイント④の不着墨パターンは連続九行であり、それは【C1型】類型に該当する。

つぎに、同面のポイント⑤の不着墨パターンは三行連続し、やはり【C1型】類型に該当する。

つぎに、同面のポイント⑥の不着墨パターンは連続七行×一一字格であり、これもやはり【C1型】類型に該当する。

以上に検討した結果、「乙本」の六ポイントの全てに該当するのは【C1—2型】類型だけであり、「乙本」も【C1—2型】類型の拓本と判定される。従つて、着墨パターン法によれば、甲乙二拓本は共に典型的な【C1—2型】類型の石灰拓本である。

なお、【C1—2型】類型に属する甲乙二拓本の制作時期は、筆者の「石灰拓本」類型・編年論によれば、一九〇三年前後～一九一二年前後に拓出されたと想定される<sup>18)</sup>。

#### 第四章 「寺内文庫甲本」「寺内文庫乙本」の着墨情況

##### 一、甲乙二拓本の一般的着墨情況

この章では、副次的な基準の(二)着墨状況に従つて、甲乙二拓本の着墨情況が【C1—2型】類型に適合するか、どうかについて考察する。

第一に、甲乙二拓本の一般的着墨情況について検討する。その一つは、拓出された文字の読み易さ、読み難さである。およそ【C1型】類型の二拓本は、広開土王碑拓本制作史上で比較的早い時期に制作されて、ごく少数の異体字等を除けば、その拓字は比較的読み易い。それに対して、比較的遅くに制作された【C2型】【C3型】類型の拓本は、塗布した石灰が剥落して、朦朧化

した拓字が相当読み難くなるのは避けられない。

その二つは、拓本の天地や行間に引かれた界線である。立碑当時に刻した界線は、荒れた碑面に塗布した石灰で消滅した拓本や、或いは塗布した石灰が剥落して出現した拓本が識別される。出現した界線も点線状のもの、ごく短いものや、やや長いもの等、様々な事例が識別される。

例えば、「甲本」第一面では、その天地の天の界線は第七～九行にわずかに認められる。また、行間のごく短い界線は第三～四行・第七字格の間、同行・二九～三〇字格の間、第四～五行・第三〇～三一字格の間、第五～六行・第三六字格の間、第七～八行・第三〇字格の間、第一〇～一一行・第二五字格の間に辛うじて認められる。

他方、「乙本」第一面の天地の界線は見当たらず、行間の界線は「甲本」と同じ位置のものや異なる位置のもの、同じ長さのものや異なるものも見られるが、甲乙二拓本の拓出状況は総じてほぼ同じ状況と判断される。

その三つは、拓本に現れた小白点群である。この小さな小白点群は、風化した碑面本来の小さな凹処か、塗布した石灰が剥落してできた小さな凹痕であつて、石灰塗布最盛期には石灰で塗り込められて、表出していなかつたものである。ところが、碑面の石灰は拓本を拓出するたびに剥落し、その下からしだいに小白点群が出現するのである。

甲乙二拓本の拓字の読み易さ、天地・行間の界線や小白点群に見られる着墨情況は、私見によれば、石灰塗布最盛期の【C1—1型】類型より新しく、石灰剥落期に属する【C2型】【C3型】の二類型より古くに拓出されたと思われる。換言すれば、この二拓本は【C1—2型】類型に最も適合すると想定される。

##### 二、甲乙二拓本の時系列的位 置

第二に、甲乙二拓本の石灰文字の時系列的位 置について検討する。そのために、まず、この二拓本と同じ【C1—2型】類型の「東京大学文学部考古学研究室甲本(東大考古甲本)」との三拓本を取り上げる。つぎに、各種類型の石灰拓本から一つずつ、任意に【C1—1型】類型の「学習院大学乙本」<sup>19)</sup>、【C1—3型】類型の「勝浦駒雄本」<sup>20)</sup>、【C2型】類型の「梶本益一本」<sup>21)</sup>、【C3型】類型の「書学院本」<sup>22)</sup>を取り上げる。

釈文 (正釈) 位置	天 I 03-27	履 I 03-41	跪 II 04-25	軍 II 08-36	論 III 02-19	看 IV 02-35
原石拓本 A 4型 水谷悌二郎本						
墨水廓填本 B型 酒匂景信本	因	黄	歸	兵	朝	都
石灰拓本 C 1-1型 学習院大乙本	因	黄	歸	兵	朝	都
石灰拓本 C 1-2型 東大考古甲本	因	黄	歸	兵	朝	都
石灰拓本 C 1-2型 寺内文庫甲本	因	黄	歸	兵	朝	都
石灰拓本 C 1-2型 寺内文庫乙本	因	黄	歸	兵	朝	都
石灰拓本 C 1-3型 勝浦頼雄本	因	黄	歸	兵	朝	都
石灰拓本 C 2型 梶本益一本	因	黄	歸	兵	朝	都
石灰拓本 C 3型 書学院本	因	黄	歸	兵	朝	都

図表1 類型別墨本の石灰文字変遷図

また、上記の七拓本から各々石灰文字、そのうち代表的な石灰誤字の「因」(正釈は「天」、以下この書式に倣う)、「黄」(履)、「歸」(跪)、「兵」(軍)、「朝」(論)、「都」(看)の六文字を取り上げる。そのほかに、比較の基準として標式的な二墨本、即ち【A 4型】類型の原石拓本「水谷悌二郎本」<sup>(24)</sup>と、【B 型】類型の墨水廓填本「酒匂景信本」<sup>(25)</sup>とを取り上げる。以上の九墨本、五四文字を各類型の時系列で整理して「図表1」を提示する。

はじめに、水谷悌二郎本と酒匂景信本とを比較して、学習院大学乙本より以下の拓本の石灰誤字に対する評価基準を確認する。原石拓本の水谷悌二郎本は一八八九年、発見直後の荒れた碑面をそのまま拓出したものであり、碑字を一見ただけでは殆ど判読し難いか、全く判読できない文字である。しかしながら、水谷悌二郎本を含む原石拓本の拓字こそ、各種類型の墨本のなかで立碑当時の刻字に最も近いものである。

それに対して、墨水廓填本の酒匂景信本は、制作者が原石拓本を手本として写しとり、手書きで字画を太く、文字を鮮明に写しとり、だれもが読み易いものである。しかし、それは原石拓本とは全く異質の手書きのものであり、その六文字は全て誤字である。つぎに、墨水廓填本の酒匂景信本と石灰拓本の学習院大学乙本とを比較して、両墨本の共通性を確認する。両者の六文字を比較して気づくのは、相互にみな同じ文字であること、即ち酒匂景信本の誤字がそのまま学習院大学乙本に継承されたことである。

ただし、詳しく観察してみると、両者に小異があるのは避けられない。例えば、酒匂景信本に比べて、学習院大学乙本の拓字はやや細めに作る。また、「黄」字はやや扁平に作り、「歸」の異体字を別の異体字に作り、「兵」字の第一画を少々斜めに作り、「都」字の「者」画は文字全体のバランスをとって少々小さく作る。しかし、以上の小異にかかわらず、前者の誤字が後者に与えた影響は圧倒的、かつ決定的である。

つぎに、【C 1-1型】類型の学習院大学乙本より以下、【C 3型】類型の書学院本までの変遷過程において、石灰誤字が示す一定の傾向性を確認する。その一つは、文字の読

み易さであって、初めに明瞭で読み易かった石灰文字が、類型の推移するにつれて崩れ出し、しだいに模糊朦朧化して読み難くなってゆく。

もう一つは、小白点群の出現状況であって、初めに殆ど見られなかった小白点は、類型の推移するにつれて出現し、その後爆発的に出現したために、文字自体が模糊朦朧となってゆく。それらの傾向が相まって、拓本の着墨情況は濃墨から淡墨へ変化するのである。

つぎに、各種類型の石灰拓本の「黄」字の変遷過程を追跡し、その時系列的な位置を確認する。この「黄」字〔I03—41〕は碑面の最下段のキズ部分に位置する石灰誤字であり、通常一般の拓字の変遷過程の流れを集約し、その流れを明晰詳細に追跡可能な事例である。

学習院大学乙本の「黄」字にキズがなく、その状況は東大考古甲本に継承される。その次の寺内文庫の甲乙二拓本の「黄」字も明晰ではあるが、よく見ると、「黄」字の「田」画の右下隅に小さなキズが現れる。その後、勝浦鞆雄本の「黄」字の下半部の石灰が崩落し、やや大きいキズが現れる。ところが、梶本益一本と書学院本では大きく様変わりして、「黄」字を作った石灰はほとんど剥落し、その下から水谷倂二郎本の「履」字の残画、つまり石灰塗布以前の模糊たる残画が表出するのである。

以上の追跡結果に基づいて、まず「黄」字に小さなキズが現れた寺内文庫の甲乙二拓本は、キズのない【C1—1型】類型の学習院大学乙本の後に拓出されたこと、また甲乙二拓本は「黄」字にやや大きいキズが出現した【C1—3型】類型の勝浦鞆雄本の前に拓出されたこと、その中間に位置する甲乙二拓本は【C1—2型】類型に最も適合することが分かる。

以上の考察によれば、甲乙二拓本の時系列的な位置は、着墨情況から判断して【C1—2型】類型に適合する。ちなみに、東大考古甲本は甲乙二拓本と同じ類型に属するが、まだ二拓本に見るようなキズは現れず、従って二拓本より以前に拓出されたことが分かる。

## 第五章 「寺内文庫甲本」「寺内文庫乙本」の用紙法

### 一、甲乙二拓本の各種用紙

この章では、副次的な基準の(三)用紙法に従って、甲乙二拓本の用紙法が【C

1—2型】類型に適合するか、どうかについて考察する。およそ石灰拓本の用紙法で注目したいのは「着墨時用紙」、「継ぎ貼り用紙」、「標準用紙」等の各種の用紙である。

まず、「着墨時用紙」とは、碑面に小紙を継ぎ貼りして作った各面一枚の大きな紙をいう(着墨後には拓本一枚になる)。ただし、着墨時用紙の大きさは、碑石各面の個別具体的な実状に対応してそれぞれ異なるが、甲乙二拓本の場合には、着墨時用紙の第Ⅱ・Ⅳ面の最大横幅が上端・下端の横幅より長い。また、各面の着墨時用紙の縦の長さも一致せず、「乙本」の場合は第Ⅰ面と第Ⅱ面の最大差が一四センチ、ほぼ碑文の一字格に相当する。

ここで指摘したいのは、各面の着墨時用紙が必ず一枚に限定されることである。この各面一枚の原則は、【C1—2型】類型を含む【C型】類型の石灰拓本に固有のものである<sup>25)</sup>。

つぎの「継ぎ貼り用紙」とは、着墨時用紙を作るために用いた小さな紙をいう。継ぎ貼り用紙の定型的な貼り方は、まず、各面上端の第一段から下方へ順を追って継ぎ貼りし、最下段(甲乙二拓本の場合は第九段)に至る。その継ぎ貼り用紙が下方に食み出た場合には、食み出し部分を剪り取って調整する。つぎに、各段においては右端から左方へ、或いは左端から右方へ継ぎ貼りする。継ぎ貼り用紙が左端か右端に食み出た場合には、やはり食み出し部分を剪り取って調整する。このような貼り方は、石灰拓本「用紙継ぎ貼り法」という。

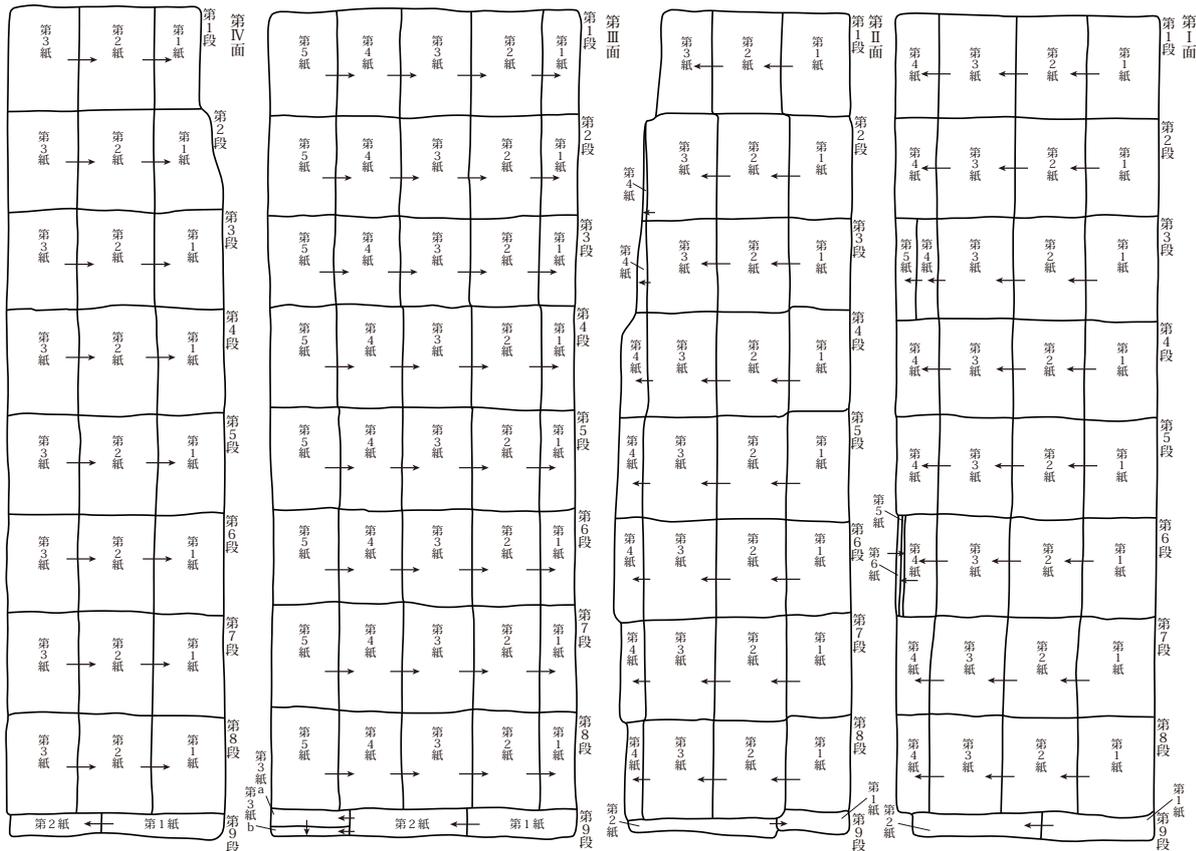
継ぎ貼り用紙の枚数は、甲乙二拓本の各面の広さが区々であり、また食み出し部分が存在するために、或いはその他の事情によって、拓本ごとに、また拓本の面ごとに、さらに各面の段ごとに異なる数値を示す。それらの枚数は、通例、当該拓本の類型に対応しない。

つぎの「標準用紙」とは、大小様々な多数の継ぎ貼り用紙のなかで平均的で標準的なものを、つまり最も枚数の多いものであり、また通例最も大きいものである。甲乙二拓本の標準用紙の大きさはほぼ同じであって、およそ縦六七×横四〇センチである。

なお、「乙本」を通覧して気づくのは、拓本の着墨時用紙の表面に、しかも着墨以前に、ごく小さな紙を幾つか貼付したことである<sup>26)</sup>。着墨時用紙の表面ではなくてその裏面に、かつ着墨以前ではなくてそれ以後に貼付された小紙はよく見かけるが、それらは主として着墨時に破損した部分を修復したもので

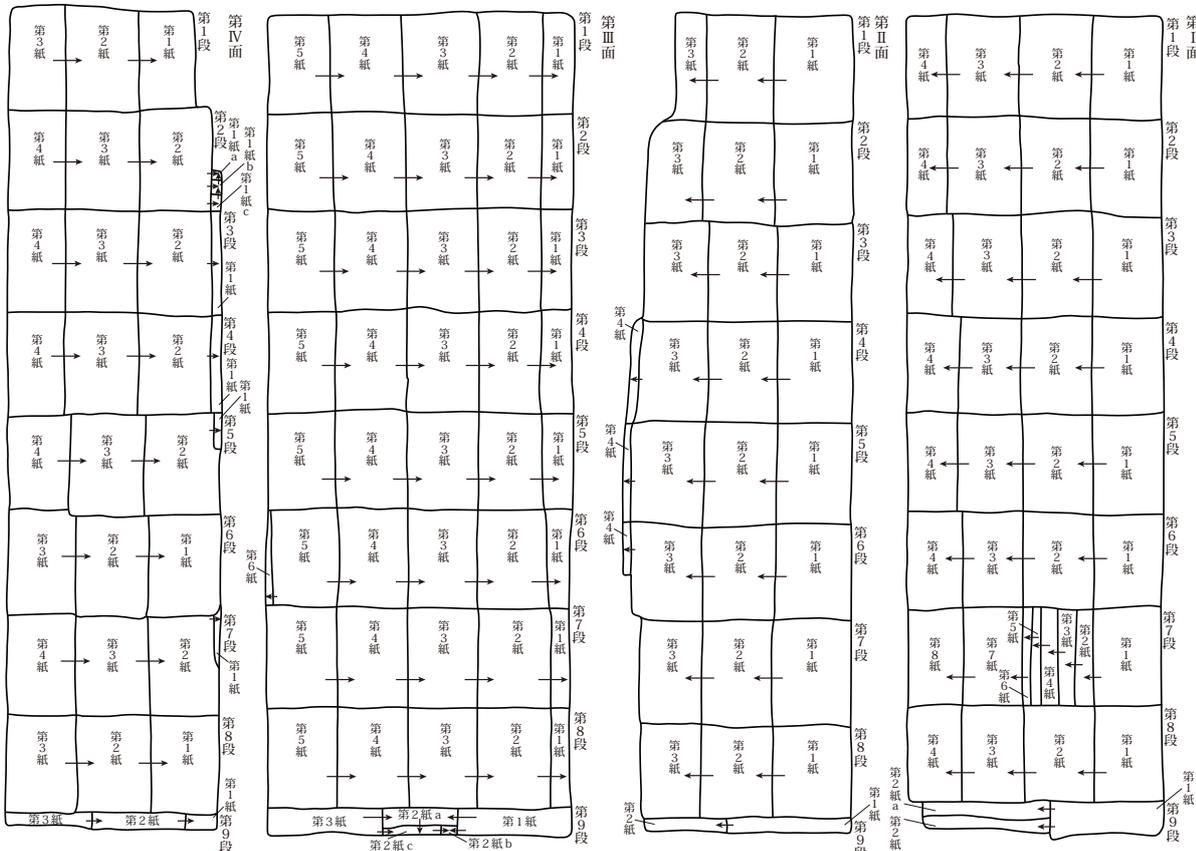
図表2 「寺内文庫甲本」用紙継ぎ貼り法略図

→印は継ぎ貼り順序(方向)



図表3 「寺内文庫乙本」用紙継ぎ貼り法略図

→印は継ぎ貼り順序(方向)



ある。甲乙二拓本の表・裏や着墨時の前・後を問わずに小紙を貼付したのは、継ぎ貼り用紙の薄さ、その粗雑さに対処するためである。

## 二、甲乙二拓本の欠如部分の用紙法

甲乙二拓本は用紙継ぎ貼りに従って制作された。その継ぎ貼り法の実態は共同研究者・赤羽目匡由氏、橋本繁氏によって精査実測された<sup>27)</sup>。その結果を整理して「図表2」「図表3」に示す。

「図表2」「図表3」および「写真1」「写真2」を通覧して注目したいのは、伝統的な四角形の拓本に馴染まぬ欠如部分が、甲乙二拓本の各面に幾つか認められることである。まず、「甲本」から見てゆこう。欠如部分の一つは第Ⅱ面左端の部分、即ち(a)「□□背急」(Ⅱ09—08—11)、(b)「十九盡拒□□」(Ⅱ10—17—22)、(c)「□□其(中略)□言」(Ⅱ10—31—41)の三か処である。(a)(b)は用紙不足、(c)は用紙不充の欠如部分である。

その二つは第Ⅲ面右端の第一行・全四一字符格(Ⅲ01—01—41)の一か処である。それが用紙不充であることは、不着墨ポイント④⑤⑥に関してすでに指摘した通りである(本稿第三章一)。

その三つは第Ⅳ面の右上隅、即ち(a)「七也」(Ⅳ01—05—06)、(b)「利城」(Ⅳ01—07—08)の二か処である。(a)は用紙不充、(b)は用紙不足の欠如部分である。ちなみに、(a)の上部の四字相当(Ⅳ01—01—04相当)の空格は、もともと立碑当時に欠損して刻字されなかった位置である<sup>28)</sup>。

その四つは、そして最も重視したいのは第Ⅰ面の左下隅、即ち「□□」(Ⅰ11—41)の用紙不充の一か処である。わずか一字符格にすぎないが、この欠如部分は「甲本」の属すべき類型を強く示唆する事例である。

これまでの調査によれば、用紙不充が認められる拓本は、石灰拓本の計三三本のうちで一六本を占める。これを類型別で整理すると、「C1—1型」類型の二拓本は全て用紙不充であり(一〇〇%)、「C1—2型」類型の一二拓本のうちで用紙不充は一〇本(八三%強)、「C1—3型」類型の三拓本のうちで用紙不充は二本(六七%弱)である。以上をまとめると、「C1型」類型の計一七拓本のうちで用紙不充は一四本(八二%強)に達し、かなり高い水準を保つ。

それに対して、「C1型」類型に後行する「C2型」類型の計一三拓本のうちで用紙不充は二本(一五%)にとどまり、「C3型」類型の計三拓本に用紙不

充は見当たらない。「C2型」「C3型」の二類型をまとめると、その合計一六拓本のうちで用紙不充は二本(一二%弱)の低い水準を示す。

即ち、用紙不充の石灰拓本は、石灰塗布初期の「C1—1型」類型が一〇〇%から出発し、その後しだいに減少して、最末期の「C3型」類型では〇%となり、ついに消滅してしまう。このような変遷過程のなかで、第Ⅰ面左下隅の欠如する「甲本」は「C1型」類型の「C1—2型」類型に適合する。その一方で、「乙本」の欠如部分を精査してみると、偶々欠如部分の七か処も、またその位置も「甲本」と殆ど同じであり、それには勿論、第Ⅰ面左下隅の欠如部分も含まれる。

ちなみに、細密なレベルでいえば、「乙本」の欠如部分が「甲本」と違うのは、第Ⅱ面の(c)に用紙不充の「□□」(Ⅱ10—29—30)を加える事例と、第Ⅳ面の用紙不充(a)「也」(Ⅳ01—05)を用紙不足に改める事例とのわずか二か処、三字符格だけである。

即ち、欠如部分の存在する「乙本」もまた、「甲本」の場合と同様に、まさしく「C1—2型」類型に適合するのである。

## 三、甲乙二拓本の用紙継ぎ貼り法

さて、「図表2」「図表3」を通覧して、第一に指摘したいのは、甲乙二拓本の各面の段数構成である。さきに記したように、二拓本の標準用紙は縦六七×横四〇センチであるが、その縦の長さは着墨時用紙の段数と連動して、各面は全て九段で構成される。最下の第九段の継ぎ貼り用紙の縦の長さは標準用紙に比べてかなり短い、それは最下段で継ぎ貼り用紙の食み出た部分を剪り取り、碑面の実状に合わせて調整したからである(本稿本章一)。

ここで重視すべきは、各面九段の段数構成が、甲乙二拓本の属する「C1—2型」類型に適合することである。これまでの調査では、甲乙二拓本を含めた「C1—2型」類型の一二本のうちで、同じ大きさの標準用紙を用い、かつ同じ九段で構成された拓本は九本(七五%)にのぼる<sup>29)</sup>。

第二に指摘したいのは、甲乙二拓本の第Ⅰ面第一段の貼り始めの位置である。これまでの調査によれば、各種類型の石灰拓本は、その類型の違いを問わず、第Ⅰ面以外の各面の第一段の貼り始めの位置は一定しており、第Ⅱ面では右端から、第Ⅲ・Ⅳ面は左端から貼り始めたことが分かる。おもうに、拓工は碑面

上部の荒れた欠如・損壊部分を避けて、その反対側の荒れていない部分、即ち継ぎ貼りし易い部分から貼り始めたからである。

ところが、第Ⅰ面上部の左右両端に欠如・損壊部分は見当たらず、そのため右端から、或いは左端から貼り始めたのであって、必ずしも一定していない。しかし、ここで重要なのは、一定しなかった第Ⅰ面第一段の貼り始めの位置が、類型の違いにはほぼ対応することである。即ち、【C1-1型】類型の拓本は右端から貼り始め<sup>30)</sup>、それに対して【C2型】【C3型】類型の拓本は左端から貼り始める傾向が認められる。甲乙二拓本は共に第Ⅰ面第一段の右端から貼り始めたのであり、従って【C1-2型】類型に適合すると思われる。

第三に指摘したいのは、甲乙二拓本の各面・各段の継ぎ貼り順序(または方向)である。まず、はじめに、「甲本」の不整齊貼りの事例を抽出する。その一つは「逆貼り」である。逆貼りは第一段の継ぎ貼り順序(方向)を基準とし、第二段以下の各段において、第一段と逆の方向へ貼り進む貼り方をいい、その事例は第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ面の第九段に各々一例ずつ確認される。

もう一つは「塞ぎ貼り」である。それは同一の段落において、次の継ぎ貼りに用紙を一枚飛ばして貼り進み、貼り終わってから後戻りして、先に飛ばした部分を貼り塞ぐ貼り方をいい、第Ⅰ面第六段に確認される。

また、もう一つは「上下貼りa)」である。それは同一の段落において、複数枚の継ぎ貼りに用紙を上から下へ継ぎ貼りする貼り方をいう。「甲本」の場合には、上記の「複数枚」は上下二枚に相当し、第Ⅲ面第九段の第三紙aと第三紙bとに確認される。

「甲本」の不整齊貼りは合わせて五例を数え、比較的単純な逆貼りのほかに、比較的複雑な塞ぎ貼りと上下貼りが抽出された。しかし、ここで留意したいのは、それら五例で用いられた用紙が全て標準用紙ではなくて、標準用紙を裁断した小紙に限られるということである。即ち、「甲本」で用いられた標準用紙の用紙継ぎ貼りは、全て整齊に継ぎ貼られたことになる。

つぎに、「乙本」の不整齊貼りも偶然ながら五例にのぼる。比較的複雑な事例の第一は、第Ⅰ面第九段の第二紙a・第二紙bに見られる「上下貼りa)」である。

第二は、第Ⅲ面第九段の不整齊貼りの複合形的事例である。第九段の継ぎ貼りに用紙の大きさの順に見てゆくと、その一つは、第一紙と第三紙との間に貼っ

た第二紙の「塞ぎ貼り」である。もう一つは、第二紙が上段の第二紙aと下段の第二紙b・第二紙cとからなる「上下二枚貼りa)」である。またもう一つは、第一紙と第二紙cとの間に貼った第二紙bの「塞ぎ貼り」である。ここには、かなり複雑な三重複合の不整齊貼りが抽出される。

第三は、第Ⅳ面第二段の右端の第一紙の事例である。第一紙は小さな第一紙a・第一紙b・第一紙cからなるが、それらの小紙はよく見かけるような、上から下へ継ぎ貼りするのではなくて、その逆に下から上へ継ぎ貼りする。この貼りは「上下貼りb)」という。

「乙本」の不整齊貼りは、その具体的な位置、例数、用紙の大小や形状、貼付の手法等は「甲本」とは異なるが、継ぎ貼りに用いた用紙は標準用紙を裁断した調整用の小紙であり、みな(小紙を用いた不整齊貼り)の事例であって、その点では甲乙二拓本に共通する。しかし、この事例は甲乙二拓本の全七二段のうちで七段(九%強)にすぎず、甲乙二拓本は標準用紙を中心にして、整齊爾々と継ぎ貼られたと評価される。

その一方で、甲乙二拓本の(標準用紙を用いた不整齊貼り)は見られない。各種類型の変遷過程において、改めて(標準用紙を用いた不整齊貼り)の事例を抽出してみると、【C1-1型】【C1-3型】の二類型には見当たらず、また【C1-2型】類型を含めた【C1型】類型一七拓本のうちで二本(二%強)に止まるが、【C2型】類型一二拓本のうちで七本(六六%強)に増加する。

これまで類型別に【C型】類型に属する拓本の(標準用紙を用いた不整齊貼り)の事例を抽出し、その事例の見当たらない甲乙二拓本は【C1型】類型により適合し、【C2型】類型により適合しないとされる。その意味で、この二拓本は【C1-2型】類型に適合的である。

本章では、甲乙二拓本の用紙法について、即ち欠如部分の用紙法と用紙継ぎ貼り法とについて様々な観点から調査した。その結果、この二拓本はその他の類型に比べて【C1-2型】類型により適合すると想定された。

以上において、本稿は寺内文庫所蔵の甲乙二拓本の実態を調査し、様々な視点からその性格について考察した。第二章では、紙墨と面番号や拓紙に付着する石灰・泥土の調査を通じて、二拓本が互いに酷似する実状について考察した。第三章では、筆者提唱の着墨パターン法により、二拓本が共に【C1-2型】

類型に属する石灰拓本と判定した。第四章では、拓字の読みやすさ、界線と小白点群の有無・多少、石灰文字の時系列的位置の調査を通じて、二拓本が【C1—2型】類型に適合することを指摘した。第五章では、拓本に用いた各種用紙の特徴、用紙の欠如部分と継ぎ貼り法の調査を通じて、二拓本が【C1—2型】類型により適合することを指摘した。即ち、甲乙二拓本の基本的な性格は、いずれも典型的な【C1—2型】類型の石灰拓本である。

## 註

- (1) 国守進「桜圃寺内文庫の成立」(国守進編『桜圃寺内文庫の研究』(昭和五十年度文部省科学研究費補助金一般研究C研究成果報告書、山口女子大学歴史学研究室、一九七六年、一〇一七頁)、伊藤幸司「桜圃寺内文庫の変遷と現状」(伊藤幸司編『桜圃寺内文庫の研究』、勉誠出版、二〇一三年、二二—六六頁)。なお、上記の国守論文は伊藤編書に若干の編者補注を付して収録されている。
- (2) 国守進「寺内文庫朝鮮本・李朝文書について」(国守進編『桜圃寺内文庫の研究』、前掲、四九頁)。
- (3) 『桜圃寺内文庫図書目録』(一九二二年二月)は伊藤幸司氏がその内容を再構成して『桜圃寺内文庫開庫時図書目録』と改題し、伊藤幸司編『桜圃寺内文庫の研究』(前掲、一三—六六頁)に収録する。原本『桜圃寺内文庫図書目録』によれば、「文庫所蔵通俗書ハ一般閲覧者ニ開放シアルヲ以テ其大部分ノ記載ヲ省略シ本目録ニハ現在ノ蔵書一万五千五百余冊中ヨリ左ノ七千九百九十冊八百七十八部ヲ引抜キ採録セリ」とある。
- (4) 田川孝三著『桜圃寺内文庫朝鮮本調査報告』(油印本、一九六五年四月五日)、二八頁。
- (5) 李進熙著『広開土王陵碑の研究(増訂版)』資料編(吉川弘文館、一九七二年)、同「広開土王陵碑研究の現状と課題」(『歴史学研究』四一〇、一九七四年七月)。
- (6) 国守進編『桜圃寺内文庫の研究』(前掲)、四九頁。
- (7) 国守進編『桜圃寺内文庫の研究』(前掲)、八二頁。
- (8) 武田幸男著『広開土王碑墨本の研究』(吉川弘文館、二〇〇九年)三七四頁の「附録一 類型別「広開土王碑」墨本目録(案)」。
- (9) 伊藤幸司編『桜圃寺内文庫の研究』(前掲)、七二頁。なお、寺内文庫の拓本が朝鮮総督府官房「参事官室」から寺内総督に献呈されたという推定は、当時の拓本相互の個別的な異同を追跡してみると、成立し難いように思われる。
- (10) 甲乙二拓本の各面の「第一段」等で示した「段数」については、本稿第五章の「図表2」「図表3」参照。
- (11) 石灰粒の付着、或いは剥落が確認された石灰拓本は、これまでの調査では、「寺内文庫甲本」を含めて一二本にのぼる。なお、「寺内文庫乙本」の調査では、石灰粒は発見されなかった。
- (12) 「ポイント」①とは、本稿第三章で記すように、筆者が提唱する「石灰拓本」類型・編年論の判定基準のうちで、基本的な基準とする六つの不着墨部分、即ちポイント①—⑥の第一番目のものである。
- (13) 今西龍「広開土境好太王陵碑に就て」(久米邦武著『訂正増補大日本時代史(古代)附録』、一九一五年原載)、今西龍著『朝鮮古史の研究』(国書刊行会、一九七〇年再録)、四五四—四五五頁。
- (14) 「継ぎ貼り用紙」とは、石灰拓本に用いる各種用紙の一つ。各面一枚の大きな着墨時用紙を作るために継ぎ貼りの小紙をいう。本稿第五章参照。
- (15) 泥土が拓本の裏面に付着した事例は、これまでの調査では【C1—2型】類型の「落合為誠本」の一か処と、【C2型】類型の「菅野敏夫本」の一か処とに限られる。
- (16) 「着墨パターン法」の基本的な考え方は、武田幸男「広開土王碑」墨本の基礎的研究」(『東方学』一〇七、二〇〇四年一月)、同「石灰拓本」着墨パターン法と「お茶の水女子大学本」(古瀬奈津子編『広開土王碑拓本の新研究』、同成社、二〇一三年)参照。とくに拓本類型と不着墨パターンとの対応関係については、後者掲載の「表1「石灰拓本」不着墨パターン対照表」(二五九頁)参照。
- (17) 石灰拓本の第Ⅲ面第一行は長年の風化と、発見直後の碑面の焼却によって摩滅損壊した結果、拓工が刻字を認識できず、それを無視して着墨しなかった位置である。武田幸男「広開土王碑」火難説の批判的検討」(『慶北史学』二三、韓国・慶北史学会、二〇〇〇年八月)、武田幸男著『広開土王碑墨本の研究』(前掲)総論第一章。

- (18) 武田幸男「広開土王碑「田山花袋本」の研究」(『田山花袋記念文学館研究紀要』二八、二〇一六年三月)所掲の「図表6 「石灰拓本」類型・編年暫定表」参照。
- (19) 武田幸男「学習院大学所蔵「広開土王碑」拓本の研究」(『東洋文化研究』一六、学習院大学東洋文化研究所、二〇一四年三月)。
- (20) 武田幸男「広開土王碑「宮崎県総合博物館本」の研究」(『宮崎県地域史研究』二九、宮崎県地域史研究会、二〇一四年三月)。
- (21) 長正統「九州大学所蔵好太王碑拓本の外的研究」(『朝鮮学報』九九・一〇〇、朝鮮学会、一九八一年七月)。
- (22) 武田幸男「鄭孝胥下命制作」広開土王碑拓本の研究——【C3型】類型・三拓本の場合——(『稿本』)。
- (23) 武田幸男著『広開土王碑との対話』(白帝社、二〇〇七年)第七章、同著『広開土王碑墨本の研究』(前掲)各論三第二章。
- (24) 武田幸男著『広開土王碑墨本の研究』(前掲)各論二第一章。
- (25) 石灰拓本【C型】類型【C0型】類型は除く)の各面一枚の原則に対して、原石拓本【A型】類型は各面三枚以上である。また、墨水廓填本(酒匂景信本)【B型】類型と模刻本【D型】類型は共に用紙継ぎ貼り法に従わず、前者は各面平均三・二・五枚、後者は各面不定の複数枚である。墨水廓填本については、武田幸男著『広開土王碑墨本の研究』(前掲)、二一四～二一八頁、「図25」参照。模刻本については、同「広開土王碑模刻本「観峰館本」の研究」(『観峰館開館二〇周年記念論文集』、日本習字教育財団観峰館編集・発行、二〇一五年、一九～二四頁)参照。
- (26) 「乙本」の表面に貼付された補助紙は約五×五センチほどのごく小さな紙であり、いずれも第IV面の「墓」字(IV 06-09)、「人」字(IV 08-09)、「開」字(IV 08-19)の位置で確認された。
- (27) 甲乙二拓本の調査には、共同研究者二人のほかに、山口県立大学々生(当時)・藤井真里奈さん、山崎由絵さんの助力をいただいた。ここに記して感謝する。
- (28) 広開土王碑拓本の第IV面右上隅の実状は、かつて水谷悌二郎氏によって初めて精査された。水谷悌二郎「好太王碑考」(『書品』一〇〇、東洋書道協会、一九五九年六月、一四九～一五〇頁)、同著『好太王碑考』(開明書院、一九七七年)、六四～六七頁。
- (29) 九段構成の【C1-2型】類型の九本のうちの一本、「落合為誠本」の第三面のみが八段構成である。なお、【C1-3型】類型の「勝浦頼雄本」、【C2型】類型の「多胡碑記念館本」は、いまのところ当該類型の例外として唯一つ、それぞれ九段構成の拓本である。
- (30) 【C1-2型】類型の「工藤壮平本」は、いまのところ当該類型のなかの例外として唯一つ、左端から貼り始めた拓本である。

## 「寺内文庫収蔵「広開土王碑」拓本の研究」要旨

武田幸男

本稿は寺内文庫収蔵の甲乙二拓本を調査し、様々な視点からその性格について考察した。第二章では、紙墨と面番号や拓紙に付着する石灰・泥土の調査により、二拓本が互いに酷似する実状について考察した。第三章では、筆者提唱の着墨パターン法に従って、二拓本が共に【C 1—2型】類型に属する石灰拓本と判定した。第四章では、拓字の読みやすさ、界線の有無、小白点群の多少、石灰文字の時系列的位置の調査により、二拓本が【C 1—2型】類型に適合することを指摘した。第五章では、拓本に用いた各種用紙の特徴、用紙の欠如部分と継ぎ貼り法の調査により、二拓本が【C 1—2型】類型に適合することを指摘した。即ち、甲乙二拓本の基本的な性格は、典型的な【C 1—2型】類型の石灰拓本である。

## A Study of Ink Copies King Kwanggaido Inscription preserved in Terauti-Bunko

Yukio Takeda

This article is to analyze two types of rubbings preserved in Terauti-Bunko from the various viewpoints. In chapter 2, I discussed the similarity of these two rubbings by examining the ink and the paper, numbering, and the character of the lime materials attached to the paper. In chapter 3, I identified both of these rubbings as a Type C1-2, according to my own method of ink pattern analysis. In chapter 4, I suggested that both of these rubbings could be adapted for the Type C1-2 by considering the character and the disposition of the lime letters, the presence of the ruled line, and quantity of the small white spots. In chapter 5, I suggested that these rubbings could as well be adapted for the Type C1-2, by examining the character of the various papers used for the rubbings, and how to patch up papers. In short, I conclude the basic character of these two rubbings as a typical lime rubbing of Type C1-2.